

創建

そうこん

2020・3・25 VOL.54 NO.3 (通巻173号)

巻頭言：出村克宣・1
 福島県建築文化賞正賞受賞：阿部直人・2
 在校生へのメッセージ・3
 大学院特別講義（泉幸甫先生）・4
 大学院特別講義（丸山一平先生）・5
 修士論文審査会／卒業研究発表会・6
 教室ニュース／卒業設計展示・7
 卒業生表彰者／大学院のスズメ・8

■ 日本大学・工学部・建築学教室 ■

好きな言葉の一つに、「無から有生む創造性」があります。その意味は、「無」から「有」を創り出すということです。しかし、何も無いところから、有形のものが生まれるのでしょうか。

ある時、自動車の発明に話題がおよび、自動車が開発された当時、エンジンも車輪もすでに存在していて、それらを組み合わせて「自動車」ができたという結論になりました。このように考えると、「無」から自動車が生まれたのではなく、自動車という概念が無かったことが「無」に相当します。

このことは、物や知識として「いま有るもの」をうまく組み合わせ、有形のものを作り出す行為といえます。建築設計のテーマが与えられて、まっさらのケント紙に建物のデザイン、ディテールを描き出す作業と同じではないでしょうか。

つまり、建築物を創造する時、これまでに造られた建物のデザインや性能、様々な構造、構法、材料などを思い浮かべながら設計することになります。そのために、私たちは、建築に関わる様々なことを学んでいるわけです。

研究テーマの多くが材料開発に関係するものなので、いくつかの素材を組み合わせ、目的の材料を作り出すことが要求されます。そのため、同じような実験を何回も繰り返すこととなります。

こんなデザイン、あんなデザイン…などと思考錯誤して、何度も図面を描き直す行為と似ています。しかし、コンクリートであれば、様々な調合で供試体を作って実験し、数値データとして結果を得なければ材料性能を評価することができません。そのため、実際に供試体を作製する必要があります。

おいしい料理を提供しようと考えたとき、素材や調味料の組合せを工夫した様々なレシピを書き出し、実際に調理して試食を繰り返すことと同じです。そして、目的とする材料

性能が得られた時の感動が達成感を生むものです。

そのような達成感が忘れられなくて建築材料の研究を続けてきました。混ぜるものを変えれば、新しい答えが得られるのは当たり前と指摘されたことがあります。しかし、目標とする性能が得られるまで、使用材料の調合割合を1/100や1/1000の精度で変えながら、実験を何度も繰り返し返さなければならぬのであり、新しい答えであれば何でもよいわけではありません。

エジソンは多くのものを発明していますが、世間一般で必要とされるもの以外は役に立たないものとして切り捨てています。このことから、ベンチャーの創設者はエジソンであるといわれています。

私の研究歴

教授 出村 克宣

技術とは、一定の目的を達成するための具体的な手段であって、技術によって創出されたものは、社会（市場）で受け入れられて初めて有用なものとなるという指摘につながります。工学分野の研究者にとっても、工学の研究成果は社会で使われ役に立つものでなければならぬと考えています。

現在の理工学部海洋建築工学科につながる海洋コースが建築学科に設置された学部2年の時、故岩崎博先生（元日本大学教授／工学部建築学科）の研究を手伝ったのが研究歴の始まりです。その時のテーマは「海洋景観価値計量化に関する研究」で、建物や緑が混在する臨海地域を見た時の目の動きを定量化して、その景観を評価するというものでした。

その後、3年後期から、新材料を用いたコンクリート梁部材に関する先生の博士論文作成が始まりました。当時、先生は霞が関の建設省（現：国土交通省）勤務だったので、

2, 3年次は、夕方、新宿区大久保（後に、つくば市に移転）の建築研究所（建研）の某研究室に集合して、お手伝いをしました。

新材料としてポリマーコンクリートやポリマー含浸コンクリートを用いたものだったので、建研におられた、その材料分野の世界的権威である大濱嘉彦先生（日本大学名誉教授／工学部建築学科）に出会いました。この分野は、コンクリート・ポリマー複合体という材料分野で、1981年5月には、工学部で国際会議が開催されました。このような縁で、卒業研究は建研の大濱研究室で行い、学部卒業後、郡山にきました。

現在、その一つであるポリマーセメントモルタル、ポーラスコンクリート、環境調和型建築材料に関する研究を継続しています。これまで、ポリマーセメントモルタルの関連JIS改正のための性能評価やRC構造物の補修材料としての性能、ポーラスコンクリートの調合設計法、強度や弾性係数の推定式、水質浄化性能、又、環境調和型建築材料については、コケ吹付け工法による屋上緑化システム、まさ土を用いた簡易土舗装システム、高耐久性塗料、竹補強モルタルの開発などをテーマとする研究を行ってきました。

これまでの研究成果については、1978年から2002年まで大濱先生と共同で、コンクリート・ポリマー複合体に関して236編、その後2020年まで、齋藤准教授と共に54編の審査論文を日本建築学会、日本コンクリート工学会、セメント協会、日本材料学会、関連国際会議などの学会誌や論文集に発表しました。

ご指導いただいた岩崎博先生、大濱嘉彦先生、共同研究者である齋藤俊克先生はもちろん、多くの卒業研究生・大学院生に感謝致します。又、研究活動を活発に行うことができたのは、工学部並びに建築学科がすばらしい研究環境を提供してくださったことによるもので、心から厚く御礼申し上げます。（工学部長）

第36回福島県建築文化賞 正賞受賞

天正坦のアトリエ ～地域の風景とかかわる建築～

ARCHISTUDIO/有限会社 阿部直人建築研究所
非常勤講師 阿部直人

■環境をつくる

今まで建築されたことのない土地を取得し自分の仕事場をつくることになり、まず周囲の先住者の方々に対し十分な配慮が必要と考えました。

東隣の広い庭のある家のおばあさんは、いままでゴミ出しや買物などにこの空地を横切っていました。そこで境界に塀をつくらずこれからも自由に行き来できることを提案し、植物の根の遮断のためにポリカ波板を30cm埋め込みました。おかげで道路から見ると事務所の庭がずっと向こうまで広がって見えます。北側の家は地盤が80cm上がっていましたが、桁の高さをぎりぎりまで抑え、隣家の茶の間からの眺望を確保しました。道路を挟んだ向かい側の畑にはおばあさんと息子さんが手入れに来ます。建物を道路から後退させ車と車の間に植栽帯を入れて配置することで、なだらかな坂道を歩くときに両側の広がりや緑が感じられます。

竣工してみると、ゆったりとしたこの場所のもつ開放感を活かし、傾斜地を造成せずに建築を元々持っている地形になじませるようにつくることで自然な風景になりました。この結果は、周囲に暮らす方やここを通る人たちにも伝わるのではないかと思います。周囲の様子や人々の生活をつぶさに観察し、良い部分を引き立たせるように丁寧に建築の配置やつくり方を考えることで風景は豊かになり、まちは良くなります。そして環境が大切にされることを期待しています。



■建築の形態

軒の出が異なる切妻屋根の木造平屋で4.8mスパンの合掌梁の根元を9φのタイバーで引張り十間連続させ、壁と屋根の間に15cm巾のガラスのスリットを入れて、セメント板の天井が重苦しくならないようにしました。

南下がりの地形に合わせるように床だけを32cmずつ下げて4つのフロアーをつくり、北から収納、作業スペース、玄関と水回り、一番天井が高い所を打合せスペースとしました。南側の引戸を全開するとデッキテラスから南下がりの庭へと空間が流れていきます。仕上げは外壁が大きなガラスの木製建具が組み込まれた杉板張り、内部は温水パイプ埋設のシリカ混入コンクリートの床、杉板と左官塗りの壁、軒天までのびる硬質木片セメント板の天井、ほとんどが無塗装です。小さな建築ほどスケールや素材のテクスチャーなどに気を配ることが大切で、ディテールや家具を丁寧に作りこんでいくことで内部空間に広がりや生まれてきます。

地元での設計活動を振り返ってみて、近すぎて見えないこともあるかもしれませんが、ここに暮らしていることでわかること感じることは数多くあります。これからも人に寄り添い、福島で地域の豊かさに貢献できるような建築をつくり続けていきたいと思っています。



■建築概要

所在地 福島県郡山市
大槻町天正坦
主要用途 事務所
建築面積 92㎡
延床面積 88㎡
階数・構造
地上1階・木造
設計期間
2017年5月
～2017年10月
施工期間
2017年11月
～2018年3月

工学部生へのメッセージ

公務員として、一緒に『建築』しませんか

焼津市役所 大石 一満 (2015年3月卒)

<はじめに> 私は学生時代、現在の若井名誉教授の下、人体動作空間や建築人間工学をはじめ、2014年に築100年を迎えた本宮映画劇場（本宮市）の復元図面と模型の作成を行うなど、地域の歴史的建造物の保存や継承について学びました。現在は焼津市の建築行政を司る、建築指導課の一員として、建築計画の法的チェック、禁止の解除にあたる許可行為、危険な築造物の改修や撤去の推進などを行っています。

<まちづくり> 本市は静岡県の中央部に位置し、県庁所在地の静岡市に隣接しています。北には富士山を望み、東には駿河湾がある、海と共に繁栄してきたまちです。本市では、「焼津に住み続けたい、住んでみたい、行ってみたい」と思えるまちづくりの実現のため、「にぎわい交流拠点づくり」をテーマに、まちづくりプロジェクトに取り組んでいます。

<施設づくり> 建物の寿命は様々ですが、公共施設の計画保存周期は80年程といわれています。本市では、庁舎や市立病院の建替え、こども館の新設など、大型施設の建設計画に

取り組んでおり、人生に一度あるかどうかの市のビッグプロジェクトが、今まさに進められているところです。

<市役所の仕事例> 道、街区、公園などをつくり変える都市計画や地区計画の策定、庁舎、学校、公民館、市営住宅などの公共施設の設計や工事監理、維持管理、空き家の利活用、建物を建てる前に必要な許可や認定、建物所有者、設計者、建設会社への指導や助言、市民が安全安心に生活できるための規則やルールづくりなど、民間同様のものに加え、民間にない、市民生活に直結する様々な建築関係の仕事があります。

<職場環境> 私自身、一級建築士試験合格者であり、静岡県庁へ出向した経験もあります。福利厚生は勿論、様々な資格を取得しやすく、国、県、他市町、関係機関等への出向も可能であるなど、自らの世界を広げることができる職場です。

<おわりに> 「このまち、この施設は私がつくりました」といえる、「あなたのおかげで助かった、ありがとう」といわれる、公務員の仕事を、一緒にしてみませんか。

学生時代の貴重な経験を糧に志はつづく

大学院博士前期課程2年次生 伊藤 和輝

私が漠然と建築設計職を志してから9年が経とうとしている。高校、大学、大学院と進学する中で心境は微妙に変化しながらも、志がブレなかったのは、その時々建築について考える刺激的な体験があったからだと思う。

初めて建築現場に触れた高校時代は、建築の仕組みや、様々な人の立場・技術のあることを知った時期で、この時に改めて、意思を形にできる建築設計職を本格的に学ぼうと決心した。その後、大学に入学してからは、演習に限らず全ての課題を、設計に役立つ知識として身に付けることを意識しながら取り組んだ。授業後や長期休暇の際には、インターンやアルバイト等で、実際の現場を見ながら設計職で働く疑似体験をすることに努め、改めて設計分野の魅力を知った。

学部時代の後半から大学院にかけては、コンペやコンクールにも数多く挑戦したが、この経験は、自分が特にデザインする職業に必要な3つの力と考えた、豊かな発想にもつなが

る思考力、考えたことを力強く伝える表現力、相手にわかり易く伝えるプレゼン力を鍛える良い機会だった。そのため、悔しい結果も嬉しい受賞も、今後の糧になると思っている。

そして大学院時代。仕事のような体験を通して、問題を解決しながら学ぶPBL (Problem-based Learning) を意識した、研究室でのプロジェクト活動への参加は、それまでの全ての知識と経験を活かしながら取り組んだ濃密な時間だった。様々な人と協働する中で、先に述べた3つの力を絞り出して自分も考えつくり出した建築・空間が、実際に利用者にとどの様に使われるかを検証・評価した修士論文の研究も含めて、4月からの職場（岡田新一設計事務所）・職種（建築設計職）でも活かせる、貴重な経験となったと思っている。

目指した設計職に就ける今、先生方はもとより先・同・後輩と一緒に学部・大学院で学修したことを、資格の取得も含めて、社会で存分に活かすことを日々考えている。

まちづくりを学ぶために、大学院に進みます

4年次生 戸村 優

私は将来まちづくりの分野に携わりたいと思っています。『まちづくり』はかなり幅広く解釈されるだけに、その可能性も大きいと感じています。元々、人のためになることをやりたいと思っていた自分にとって、人々の生活を担うまちづくりは魅力的であり、将来のやりたいことになりました。

都市計画研究室では多くのことを学び、西郷村の道の駅計画ワークショップにも参加しました。そこでは、住民との話し合いをはじめ、役所や企業の方ともお話しをした経験から、まちづくりは決して1人でできるものではなく、地域の人の協力や行動力、なにより「地域をよくしたい」という強い気持ちが重要であると感じ、大変貴重な経験をしました。

研究室での活動や大学4年間での授業はどれも面白いと思えるものばかりで、卒業を迎える今では、日本大学工学部に入学した時よりも、さらに建築に夢中になっている自分があります。そして苦楽を共にした多くの友達にも恵まれました。

元々「大学卒業後は就職」と考えていましたが、もっと学びたい、実際にまちづくりの現場に携わりたいという気持ちが芽生え、大学院への進学を決意しました。院試勉強は範囲が広く大変な部分も多々ありましたが無事合格、今春からは千葉大学大学院での生活が始まります。日本大学工学部での学びを土台に勉学や研究活動に励み、地域の人々にとって、よりよいまちづくりに貢献できるよう努めていきたいです。

大学院特別講義聴講報告

「住宅のデザインと生産」(泉幸甫先生)を聴講して

大学院博士前期課程1年次生 仰 木 啓 大

令和元年12月20日(金)、7013教室にて、「住宅のデザインと生産—工業化と手作りの狭間の中で—」と題して、建築家・泉幸甫先生(本学生産工学部客員教授・泉幸甫建築研究所)による大学院特別講義が開催された。その内容は住宅の近代化を背景に泉先生の設計論を説く、興味深いものだった。

1. 住宅がつくる風景の違い(日本と海外)

講義の序盤は、日本の住宅群がつくる風景と、先生が海外で体験された海外の住宅群がつくる風景の比較であった。中でも、「多くの日本の風景は、とてもみすばらしく感じ、まず身の回りの環境(=住宅)から美しくすることが必要だ」という言葉は、建築に携わる者の使命のように聞こえた。ヨーロッパのみならず、同じアジアでも、各国固有の文化によって形成された特有の風景があることを再認識し、日本の住宅のあり方をもう一度考え直す時期に来ている、というメッセージのように感じた。

2. 建築の「型」と「形」

続いて、住宅を含む建築というモノづくりは、「型」と「形」の関係性から生み出される、と言われた。風土・習慣や法制、職人も含めた建築を取り巻く「型」があり「形」となる、といった関係性の中で建築の生産を捉えるようになられた、という。いい「形」はいい「型」から生まれる。そのため、「どういふ環境をつくるかの『型づくり』が、建築する際にとても大事なことだ」との言葉は、建築に携わる者として心に留めるべきものと思った。

先生は、昔からある日本の民家は現代住宅ではかなわない美しさがあると言う。そして、法隆寺や東大寺などの建築にも、つくった人の思い入れが美しさとなって反映されている、と。一方で、現代の日本の住宅のほとんどは、機能的に理にかなってはいるが、システム化されたパネル部材によってデザインに自由度のない生産方式となっている。これを見直すこと、すなわち、「形」(モノ・住宅・建築)をつくる「型」(環境)づくりを見直すことが、風景を考え直すことにもつながるとの指摘である。

3. 工業化がもたらした住宅の近代化

さらに講義は、日本の住宅の「形」と「型」に関して、近代化に伴うプレハブ住宅の普及に当たって発生した2つの生産方式の話に及ぶ。1つは、大量の純正部品でつくられるクローズドシステムという方式、2つ目は、市場で出回る部品でつくられるオープンシステムという方式である。

現代の日本の住宅のほとんどは、後者でつくられ「形」となっている。部品をバラバラに組み合わせてつくることになり、全体としての統一感が損なわれやすい。オープンシステムの問題点を解決した第三の道を模索すべきと考え、その結果、自然素材を扱う職人のネットワーク化による独自の住宅生産方式づくりに至ったというお話は、まさに「型づくり」の実践であり、とても興味深く思った。

4. 最後に

私自身も日本の風景は今後どのようになるのかと考えることがあった。技術が進化するのに伴い「型づくり」が単調になり、その結果、どこも同じで味気ない風景になることを危惧している。その流れを変えることは容易ではないが、今回の泉先生の講義で、身の回りの出来ることから少しずつ変えようとするその実践こそが必要だという認識を持つことができた。モノづくりに携わるであろう建築学生にとって有意義な講義であった。



自身の設計論を説明される泉先生

大学院特別講義聴講報告

「コンクリートの科学と工学」(丸山一平先生)を聴講して

4年次生 川崎浩長

令和元年12月2日(月)、「コンクリートの科学と工学」と題して、丸山一平先生(名古屋大学大学院環境学研究科教授、東京大学大学院工学系研究科教授)による大学院特別講義が70号館7014教室にて開催され、大学院生、学部生、先生方を含め約200名が聴講した。

講義は、自己紹介から始まり、工学の定義、コンクリートの基礎知識や環境と絡めた現状、丸山先生の研究など多岐にわたる大変充実したものだった。本稿ではその中でも特に印象に残った部分について、私の感想を交えつつ報告することにした。

1. 丸山一平先生の自己紹介

はじめに、先生の経歴について述べられた。先生は、学生時代、答えは1つの方がいいと考え材料系の研究をするが、芽が出ず、何度かテーマを変えたという。しかしながら先生は現在、2つの大学で教授を務め、さらに数々の賞を獲得する成果も収めておられる。これは、私が以前読んだ自己啓発本にあった「見切り発車は成功のもと」という言葉をまさに先生が実践されていると知って感動したが、これが後述する工学の考え方の1つであることにつながるとは全く予想もしないことだった。

2. 工学とはなにか

次に、工学の定義について述べられた。ある現象を普遍的な数式によって説明する科学とは異なり、工学は、原理が分からなくとも前に進む学問である。また、理学が既存の現象や状態の理解を追求する学問であるのに対して、工学は、どうすれば未だ存在せずかつ役に立つものを実現できるかを追求する学問であるとして、工学が、その発展のために前進する学問であることを強調する。飛行機の開発を例にとるなら、飛行の原理には現在ですら未解明の部分が残るが、それでも飛行機は、繰り返し実験をして十分に再現性を得られたなら次の段階へと進む形で、今日まで発展してきたのだという。

私は自分の知的好奇心や探求心の強さから、研究者としての道を熱望している。しかし、未解明がありながらも前進しなければならぬ状況に身を置かれるとすれば、新たな進歩に喜びを抱く半面、なにかくすぶるものも感じるに違いない。したがって、この点については、にわかには納得しかねる部分もある。その言葉の真意を理解するため、今後折に触れて考えていきたいと思った。

3. コンクリートと環境

続いてコンクリートの定義や歴史について述べられた後、話題は現代のコンクリートとそれを取り巻く環境へと移った。一概に環境問題といっても、その中身は時代とともに遷移して、公害に始まり、省エネ、自然や生態系破壊、そして現在のCO₂に起因する地球温暖化に至る。その環境問題と建設分野は大きく関係しており、アメリカを例にとれば、材料消費、エネルギー消費ともに建設分野がその大部分を占めている。日本でもインフラの老朽化が課題であり、補修や長寿命化などの対策が急がれるとのことであった。これは、自分の研究分野に照らし合わせても、近年、国家戦略の1つとして自己修復材料の開発、市場拡大が推進されており、納得できるものである。お話をうかがって、私も、現在携わるコンクリート構造物の長寿命化を目指したバクテリアを用いた自己治癒コンクリートの実用化に向けて、尽力していきたいと思った。

4. 先生の研究

先生の研究テーマは、コンクリートの養生条件からせん断破壊、放射線を扱ったものや鉄コンクリーションなど多岐にわたる。理解を少しでも深めようと何か1つでも質問しようと思ったが、専門性と学際性に富む内容に手も足も出なかった。講義の最後にさせて頂いた私の精一杯の質問は、序盤のコンクリートの歴史についてであった。非常に多くの分野の知識が必要とされる中、滑らかに説明をされるばかりでなく、英語での質問に対しても流ちょうに回答されていた。コンクリートの研究に取り組む者として力不足を痛感するとともに、ただただ脱帽するばかりであった。

5. 講義を受けて

私はこれまで卒業研究を進めるにあたって、自分なりに科学的な姿勢で臨んできたと考えている。テーマは比較的新しいもので、明らかにされていないことも多い。それをひとつひとつ解明しながら進んでいきたいところではあるが、発展のため、実用化を果すためには、優先順位をつける覚悟をする必要もあるのかもしれない。

研究初心者である私にとって、研究に対する姿勢を見直し、私の背負うテーマの重要性そして何より私の見識の未熟さを再確認した大変貴重な講義であった。



講演する丸山一平先生



丸山一平先生とRC構造・材料研究室

令和元年度 日本大学大学院工学研究科建築学専攻 修士学位論文発表会

日時：令和2年2月12日(火) 場所：70号館6階7066教室

- 3D-FEMによる鉄筋コンクリートスラブおよび柱の弾塑性挙動に関する解析的研究 荒井 就英 (指導：浅里 和茂 教授)
- 過疎地域における公共施設の役割に関する研究 -山間部の地域交流施設を対象として- 伊藤 和輝 (指導：浦部 智義 教授)
- 住民主体の景観まちづくりに関する研究 -白河市をケーススタディとして- 川口 拓海 (指導：市岡 綾子 専任講師)
- Spectral Element Method (SEM) を用いた構造物の固有値解析に関する研究 桐生 翔太 (指導：Buntara S. Gan 教授)
- 東日本大震災後に福島県に建設された応急仮設住宅の撤去に関する研究 久保田 悠人 (指導：浦部 智義 教授)
- 初期応力を考慮した実大RC造多層立体骨組の短期性能評価 黒田 啓太 (指導：浅里 和茂 教授)
- 火災時における階段室内の煙挙動の検証 齋藤 恭平 (指導：森山 修治 教授)
- 福島県における再生可能エネルギーの開発状況と地域再生 中村 豪志 (指導：濱田 幸雄 教授)
- 東北6県における地歌舞伎の運営に関する研究 -近年に運営が変化した地歌舞伎を対象として- 藤野 純也 (指導：浦部 智義 教授)
- 多目的ホールの音響特性及び設計手法に関する研究 最上 依理加 (指導：濱田 幸雄 教授)
- 災害時要支援者が存在する施設の水平避難に関する研究 森田 祥太 (指導：森山 修治 教授)

令和元年度 日本大学工学部建築学科 卒業研究発表会

日時：令和2年2月6日(木) 場所：70号館1階7014教室(五十嵐ホール)

- ポーラスコンクリートの性能評価
-材齢が圧縮強度・静弾性係数に及ぼす影響、
並びに静弾性係数推定式の提案-
柏渕 泰啓・長谷川 拓実 (指導：齋藤 俊克 准教授)
- ポリマーセメントモルタルの性能評価
-ポリマーセメントモルタル被覆による
コンクリートの中性化抑制効果-
佐々木 卓志 (指導：出村 克宣 教授)
- バクテリアを用いた自己治癒モルタルに関する基礎的研究
-セメント種類、バクテリア量による比較検討-
川崎 浩長 (指導：Sanjay PAREEK 教授)
- 超高強度鉄筋コンクリート柱の拘束効果モデル
-中心圧縮試験結果に基づく検証とPushover解析
への応用- 長岡 徹 (指導：堀川 真之 専任講師)
- 新型常時微動測定センサの設置に関する研究
小針 伊織・子安 大地・坂本 晋太郎・菅野 慎治・
竹内 慎一郎 (指導：千葉 正裕 教授)
- はり継手の耐力改善手法に関する研究
宮本 透・佐藤 雄貴 (指導：浅里 和茂 教授)
- ペントハウス等を有する構造物の模擬地震動による
2質点振動応答解析 吉田 拓哉・小関 恭文・
渡邊 俊輝・岩瀬 慶太 (指導：野内 英治 准教授)
- 建物模型を用いた減衰評価に関する研究
植竹 昌志・栗田 翼・星 和真・水野 寛仁
(指導：日比野 巧 専任講師)
- 不安定構造に関する解析的研究
-非線形解析のための弧長法の確立-
栗嶋 壱 (指導：Buntara S. Gan 教授)
- 東北地方の現存する歴史的劇場建築の実態と地域に
おける役割に関する研究
-その8 山形県内で変質した3つの地歌舞伎の分析-
橋本 真徳 (指導：浦部 智義 教授)
- 歴史まちづくり法の認定プロセスに関する基礎的考察
土井 篤史 (指導：速水 清孝 教授)
- マイクロホンアレイシステムを用いた風車回転翼の
騒音評価 佐々木 佑輔・羽生 貴大・埜 明訓・
前島 薫・日黒 成輝 (指導：濱田 幸雄 教授)
- 建築系高等教育機関における肢体不自由者の就学環境
整備に関する研究 -全国アンケート調査及び学内
実験調査結果に基づく実態検証-
中川 秀章・小山田 英晃・中山 直佑起・安藤 春樹・
高久 萌々 (指導：山田 義文 専任講師)
- 保育園の中間領域における定位性に関する研究
荒井 直也 (指導：市岡 綾子 専任講師)
- 台風19号時の学生避難行動の実態調査
-(その2) 学生の避難行動に関する分析-
高井 惇平 (指導：宮崎 渉 専任講師)
- 郡山市の学生を対象とした自転車における事故・盗難と
交通ルールの意識調査に関する研究
鈴木 淳之介・菅野 芽舞・樋口 洋祐
(指導：廣田 篤彦 教授)
- 絵図から見た白河城下の変遷と発展に関する研究
市川 祥子 (指導：山岸 吉弘 専任講師)
- いわき市を対象とした津波避難計画
-新設された津波避難ビルの効果確認-
印南 衣梨 (指導：森山 修治 教授)

学 術 論 文

* 届け出があった記事を掲載

・山田義文, 「重度肢体不自由者向け住まいの開設及び運営における現状と課題に関する研究」, 日本建築学会住宅系 研究報告
会論文集, Vol. 14, pp. 115-122, Dec 2019.

研 究 発 表

* 届け出があった記事を掲載

■第46回セメント・コンクリート研究討論会 日時：令和元年11月29日 場所：ホテルサンパレス球陽館(那覇市)
・複合則を適用したポーラスコンクリートの静弾性係数の推定 ○齋藤俊克, 出村克宣, 中田善久

■令和元年度グッドデザイン賞に、矢野英裕非常勤講師が設計された「六日町の町屋」(山形市)が受賞された。

■浦部教授は、10月31日、福島県より、「福島県立医科大学助産師養成施設整備事業」基本・実施設計業務公募型プロポーザル審査委員を委嘱され、副委員長に選出された。

■山田専任講師は、日本福祉のまちづくり学会会誌「福祉のまちづくり研究」第21巻第3号に『日本大学工学部「医療・福祉建築デザイン研究室」の取り組み』と題して寄稿された。

■廣田教授は、11月11日、JA福島より、JA福島さくら農産物直営所新築プレゼンテーション審査委員を委嘱された。

■廣田教授は、11月18日、西郷村より、スマートグリッド構築推進事業化計画プロポーザル審査委員会の委員を委嘱され、委員長に選出された。

■市岡専任講師は、11月29日、富岡町より、富岡町共生型サポート拠点整備検討委員会委員を委嘱された。

■長島久敏君(濱田研D2)は、12月5日に開催された第41回風力エネルギー利用シンポジウムにおいて、優秀発表賞(題目:乱流影響を考慮した風車音源モデルの構築)を受賞された。

■藤野純也君(浦部研M2)は、12月8日、ICS Design Award 2019(ICSカレッジオブアーツ主催)において、作品名「祭構築 山車×空き家の日常」で、一般の部(カテゴリー/建築・屋内・屋外空間)最優秀賞を受賞され

た(p8参照のこと)。

■藤野純也君(浦部研M2)は、12月11日、NORTH JAPAN YOUTH DESIGN AWARD 2019(シエルホームデザイン主催)において、作品名「中部屋時々、中庭の生活」で、審査員特別賞(橋本健史)を受賞した(p8参照のこと)。

■廣田教授は、12月25日、西郷村より、スマートグリッド構築推進事業化計画策定委員会の委員を委嘱され、委員長に選出された。

教室ニュース

■市岡専任講師は、12月25日、白河市より、白河市複合施設整備基本計画検討懇談会委員を委嘱され、会長に選出された。

■1月21日に開催された令和元年度第36回福島県建築文化賞表彰式にて、阿部直人非常勤講師が設計された「天正坦のアトリエ」(郡山市)が正賞を受賞された(p2参照のこと)。

■藤野純也君と伊藤和輝君(浦部研M2)は、1月24日、第17回主張する「みせ」学生デザインコンペ(公益社団法人商業施設技術団体連合会主催)において、作品名「屋根裏同盟」で、優秀賞を受賞された(p8参照のこと)。

■市岡専任講師は、1月25日、福島県景観アドバイザーとして、令和元年度いわき市景観セミナーの講師を務め、「歴

史を生かした景観まちづくり」と題して講演された。

■市岡専任講師は、1月27日、福島県県中建設事務所より、県土プラン県中地域懇談会委員を委嘱された。

■1月31日、速水教授と山岸専任講師が寄稿された『日本の建築文化事典』共著(平井聖編集代表・後藤治編集幹事)が丸善から出版された。



■速水教授は、建築技術2020.2月号(No.841)に、「待望の近代建築法制の通史(書評 ザ・ブックス 日本近代建築法制100年史編集委員会編『日本近代建築法制の100年』)」と題する書評を寄稿された。

■浦部研究室は、2月8日、福島県庁にて、大学の力を活用した集落復興支援事業『大桃の舞台』を活用した集落の価値の向上』の報告を行った。

■市岡専任講師は、2月13日、福島県より、福島県復興祈念公園有識者会議委員を委嘱された。

■市岡専任講師は、2月14日、白河市景観審議会会長に選出された。

編集後記

若井名誉教授から引き継いで今号まで、50号余の編集を土方・速水両先生と共に務めました。新たな令和時代の始まりを機に、編集担当を譲ることにしました。楽しみにしていただきました皆様へ、この場を借りて厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。(綾)

令和元年度 卒業設計作品展 開催報告

卒業設計展:2020年2月5~7日開催 37作品出展

卒業設計作品展(会場:郡山駅前ビッグアイ6階)

:2020年2月11~13日開催 10作品出展

外部卒業設計展示会・学外作品展等出展作品一覧

■日本建築学会「全国大学・高専卒業設計展示会」

佐藤 寛隆(指導:浦部 智義 教授)

作品名:前衛堤 -湾岸デザインの昇華-

■日本建築家協会「全国学生卒業設計コンクール2019」

海老澤 健(指導:浦部 智義 教授)

作品名:Drip -渋谷川植物園-

■レモン画翠「第41回学生設計優秀作品展」

山口 翔太(指導:渡部 和生 特任教授)

作品名:めぐりの通り路

-自転車に変化する暮らしのスタイル-

■近代建築「卒業制作2019」

関根 将苑(指導:渡部 和生 特任教授)

作品名:漂うアーカイブ

-東日本大震災・原子力災害の移動アーカイブ-

■日本インテリア学会「第25回卒業作品展」

青山 寛世(指導:宮崎 渉 専任講師)

作品名:つぐめ -忘れ去られた停車場-



■第3回日本建築家協会東北支部福島地域会賞

寺部 友理(指導:浦部智義 教授)

作品名:里に賑わいを

-一点在する施設をつなぐ高齢者SOHOの提案-

■学外作品展出展作品(上記作品の他)

池ノ谷 晟(指導:速水清孝 教授)

作品名:1000の森 -水と緑と子どもたち-

石毛 智也(指導:宮崎 渉 専任講師)

作品名:波上のみち -漁港を開く新たな終着点-

木村 凌(指導:浦部智義 教授)

作品名:素形 -島の移行と遺構-

澤島 優(指導:浦部智義 教授)

作品名:系譜の家 -家族シミュレーション-

令和元年度 卒業式・修了式における表彰者

令和2年3月25日

◇齋藤 賞◇

修士論文「住民主体の景観まちづくりに関する研究 -白河市をケーススタディとして-」 川口 拓海 (指導:市岡 綾子 専任講師)

◇北 桜 賞◇

修士論文「Spectral Element Method (SEM) を用いた構造物の固有値解析に関する研究」

桐生 翔太 (指導: Buntara S. Gan 教授)

◇桜 建 賞◇

卒業設計「里に賑わいを -点在する施設をつなぐ高齢者SOHOの提案-」

寺部 友理 (指導: 浦部 智義 教授)

卒業論文「建物模型を用いた減衰評価に関する研究」

植竹 昌志・栗田 翼・星 和真・水野 寛仁 (指導: 日比野 巧 専任講師)

卒業論文「バクテリアを用いた自己治癒モルタルに関する基礎的研究」

川崎 浩長 (指導: Sanjay PAREEK 教授)

卒業論文「いわき市を対象とした津波避難計画 -新設された津波避難ビルの効果確認-」

印南 衣梨 (指導: 森山 修治 教授)

卒業論文「絵図から見た白河城下の変遷と発展に関する研究」

市川 祥子 (指導: 山岸 吉弘 専任講師)

◇優 等 賞◇ 大友 純花, 齋藤 柁登, 桑折 真鈴

◇工学部長賞◇

学術・文化部門: 澤島 優 第23回JIA東北建築学生賞 (公益社団法人日本建築家協会東北支部主催)

奨励賞 みやぎ建設総合センター賞受賞 作品名「生彩を放つ蕎麦」

学術・文化部門: 野口 樹 第4回学生建築デザインコンペ「未来のとびらコンテスト《大学生版》」(三協アルミ主催)

佳作受賞 作品名「Urban Mountain」

学術・文化部門: 伊藤 和輝 第17回主張する「みせ」学生デザインコンペ (商業施設技術団体連合会主催)

優秀賞受賞 作品名「屋根裏同盟」

2019年度日本建築学会設計競技「ダンチを再考する」(日本建築学会主催)

支部入選 (東北支部) 作品名「屋根裏同盟」

学術・文化部門: 藤野 純也 ICS Design Award 2019 (専門学校ICSカレッジオブアーツ主催)

最優秀賞受賞 作品名「祭構築 山車×空き家の日常」

第17回主張する「みせ」学生デザインコンペ (商業施設技術団体連合会主催)

優秀賞受賞 作品名「屋根裏同盟」

2019年度日本建築学会設計競技「ダンチを再考する」(日本建築学会主催)

支部入選 (東北支部) 作品名「屋根裏同盟」

TOHOKU+ N YOUTH DESIGN AWARD 2018 (シェルホームデザイン 株式会社ホリエ主催)

佳作受賞 作品名「停留食堂 - 窯を介した交流の場 -」

TOHOKU+ N YOUTH DESIGN AWARD 2019 (シェルホームデザイン 株式会社ホリエ主催)

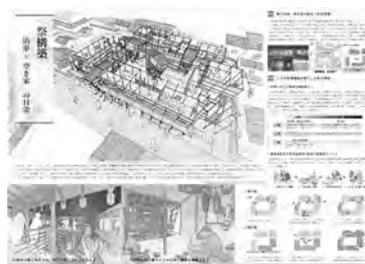
審査員賞「橋本賞」受賞 作品名「中部屋時々、中庭の生活」

大学院生活@郡山CENUのススメ

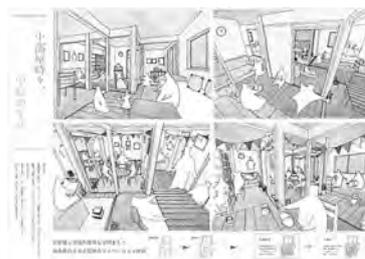
自分の力を試し続けた 素敵な挑戦

大学院時代に共同制作も含めコンペに8回挑戦した藤野純也君(埼玉県立深谷第一高校出身)は、今回の教室ニュースに3作品受賞記事が掲載されました(p7参照)。特に「祭構築 山車×空き家の日常」作品は、実務設計者も応募したコンペによる最優秀賞受賞という快挙です(詳細は本学部HPトピックス参照)。地元川越への想いが詰まった卒業設計作品をリデザインした結果が評価されたのは、自身の作品と真摯に向き合い続けた賜物です。仲間とコンペに挑戦する経験も、お互いの考えが相乗効果を生み、新たな発想へと昇華し、楽しい思い出だそうです。

研究活動など多忙な中で、大学院時代という自身がコントロールできる最も自由度の高い時間、自分に挑戦し続けた藤野君の活躍をここに記し讃えます。4月からは株式会社レーモンド設計事務所にて設計職としてスタートする藤野君。郡山での大学院時代の経験を糧に、今後も益々活躍されることを心から祈念し、応援しています(文責:市岡)。



祭構築 山車×空き家の日常



中部屋時々、中庭の生活



屋根裏同盟